

## しつけ言葉から探る「理想的」人間像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磨矢, 順子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17076">http://hdl.handle.net/2297/17076</a>

# しつけ言葉から探る「理想的」人間像\*

金沢大学 経済学部 経済学科  
社会言語学演習

代表 <sup>まやじゅんこ</sup> 磨矢順子

## <概要>

「国際化時代」と呼ばれるようになって久しい。事実、街中やテレビで、外国人を見かけるのが当たり前となった。ところが、私たちは、このような外国人の行動を見ると、何か違うといった違和感を覚えることがある。それは、コミュニケーション場面で期待される「理想的」な行動をとる人物像、すなわち「理想的」人間像が、日本人と外国人とでは違うことによるのではないだろうか。本研究の目的は、しつけ言葉を切り口に分析することで、日本人の「理想的」人間像を明らかにすることにある。しつけ言葉に関するアンケート調査、小学校の成績表の生活評価項目などを分析した結果、日本人の価値観の一部が変化しつつあることが示された。

## <目次>

### 1. 序論

- 1.1 研究目的
- 1.2 しつけ言葉における日独差からの仮説提示
- 1.3 分析対象
- 1.4 問題範囲の限定

### 2. 結果と考察

- 2.1 保護者対象のアンケート結果（表面）
- 2.2 上位4項目と人間像（仮説）との検証
  - 2.2.1 C「家族や近所の人などに、きちんと挨拶ができる」
  - 2.2.2 D「食事の時、テーブルなどに足を乗せたり、肘をついたりしない」
  - 2.2.3 B「悪いことをして注意されたら、言うことを聞いてすぐにやめる」
  - 2.2.4 H「自分の考えを他の人にははっきりと言える」

### 3 本稿のまとめ

- 3.1 日本の人間像の検証
- 3.2 しつけ言葉にこめられる親の願い—日本のアンケート収集を終えて

## 注

## 参考文献

## 1. 序論

### 1.1 研究目的

外国人を見ると、何か違和感を覚えるという経験をしたことはないだろうか。私たちは、街を歩いている外国人、テレビに映っている外国人を見て、違和感を覚えることがある。なぜだろうか。容姿や肌の色などの外見、あるいは未知の言語の音声といった表面的なものが原因ではないだろう。それは、まさに見るからに違っているのです、そのようなものとして見るため、それほど驚くことではないからである。とすると、おやっと思うのには何か別の理由がありそうだ。具体的に考えてみよう。たとえば、多くの外国人の行動を見ていると、こちらが当たり前と考えるような行動をとらない場合がある。そのときにいらいらを感じたりする。このように考えると、表面的には知覚できない部分—その人の内なる価値観・考え方に基づく行動の仕方に起因するのではないだろうか。つまり、「この場面ではこうすべき」「この場面ではこう言うことが適当だろう」といった、場面ごとに期待される行動、すなわち期待されるという意味での「理想的」人間の行動があって、その行動基準が外国人のそれと異なることが原因ではないかと予想される。

本稿では、その人間像の一端を、しつけ言葉を切り口として浮き彫りにする。ここで言うしつけ言葉とは、「挨拶をしなさい」「みんなと仲良くしなさい」といった慣用的な言語表現のことである。これらは、特定の場面で、あるいは特定の社会一般で、適切とされる行動をするように仕向ける決まり文句である。その意味で、当該社会の規範となる価値観を反映したものだ。このように考え、しつけ言葉を人間像を探るひとつの切り口として設定した。なお、当ゼミに3歳の子どもをもつドイツ人留学生クールマン・ユリア氏が所属し、本研究に参加していたことから、本稿ではドイツ語のしつけ言葉との対比も射程には入っている。

### 1.2 しつけ言葉における日独差からの仮説提示

しつけ言葉に、日独の差はあるのだろうか。私たちは差があると考え、ドイツ人留学生クールマン・ユリア氏が自分の息子に対してとる態度や発する言語表現は、私たちが記憶しているそれとは違うという印象を受けるからだ。以下に、その一例を紹介しよう。

家族旅行の帰り道、友人が駅に車で迎えに来てくれた。しかし、子どもがダダをこねて、車に乗ろうとしない。

このような出来事が起こったとしよう。おそらく日本人なら、「せっかく迎えに来てくれたのに、迷惑でしょ！早く乗りなさい。」などと言って、強引に子どもを車に乗せる人が多いだろう。ところが、ドイツ人の場合は違うようだ。実

際に、上のような場面に遭遇したドイツ人留学生は、子どもと向かい合い、何やら話した。その結果、子供は自分から車に乗ったのである。

日独とも、子どもを車に乗せるという目的は同じだ。異なるのは、その目的を達成するためのプロセスである。上の場面を振り返り、そのプロセスにどのような違いがあるのかを考えてみよう。

日本人の場合、子どもの意志や考えを尊重するというよりも、周囲に対する迷惑を優先的に考えながら、子どもと接しているといった印象をもつ。迎えに来てくれた友人を待たせてはいけないと思い、子どもが嫌がって乗ろうとしないのを無視して無理やり車に乗せているからだ。したがって、日本は**周囲の期待に対する配慮**が重要だと考えられる。

では、ドイツの場合はどうだろうか。そのドイツ人留学生は、子どもに対して車に乗らなければならない理由を説明した。そして子ども自身が、母親から提供されるさまざまな情報を手がかりに自分で考えて判断し、最終的に車に乗ると決断するまで、話し合いを続けた。このことから、ドイツの場合、**自分で考え、判断して行動**することが重要だと予想できる。

以上の考察に基づいて、日独における人間像の違いに関する仮説を提示する。

(日本) 周りの期待に対して配慮し、それに逆らうようなことをしない人間  
(ドイツ) 自分で考え、それを基準に判断する人間

本稿では、この仮説を複数のデータによって検証する。

### 1.3 分析対象

検証に利用するデータは、4種類ある。2種類のしつけ言葉に関するアンケート調査結果、保育士・幼稚園教諭の使用するしつけ言葉の使用例、小学校の成績表の評価項目である。これらのデータについて少し詳しく説明しておこう。

#### ・金沢大学の学生に対するアンケート調査 (40部)

過去にしつけられた側のデータとして、家族・学校で言われた記憶のあるしつけ言葉を収集。

#### ・保護者に対するアンケート調査 (372部) 60～61ページに調査表を添付

現在、子どもをしつけている側のデータとして、しつけ言葉の実態を調査。なお、表面の選択項目については、東(1994)を参考に問題設定した。

#### ・保育士が実際使っているしつけ言葉の調査

幼稚園・保育園を見学して、保育士が使うしつけ言葉を調査。

#### ・小学校1年生の成績表 (福井県敦賀市立中央小学校・埼玉県所沢市立梅峰小学校)

小学校の成績表には、学習面だけではなく、生活面に関する項目もある。これによって、教育における特色をも探る。

## 1.4 問題範囲の限定

Marui *et al.* (1996)によれば、コミュニケーション行動は大きく分けると3つのレベルからなるという (p. 386f.)。それを本稿に合う適切な日本語表現で定義し直してみた。

- ①規則・規範部門 一心の内にある考え。
- ②管理部門 一心の内にある考えを、特定の場所・場面で発話することが適当なのかを、判断する。
- ③発話部門 一実際に発せられる言葉。

本稿で取り扱ったデータは、アンケート調査が主である。アンケートは内省にしたがって記入するものである以上、実際発話するものではなく、心の内にある考えを対象とせざるを得ない。そのため、本研究は、①規則・規範部門に焦点をあてた分析となっている。

## 2. 結果と考察

園児の保護者に対するアンケート用紙は、A4 サイズで両面印刷 1 枚からなる。

本稿では、さしあたり、このアンケートの表面の結果を中心に分析を進める。裏面については自由記述のため、2005 年 5 月末回収見込みのドイツのアンケート結果を踏まえ、詳しい類型化を行うからである。

アンケート表面の調査を補完するために、学生に対するアンケート結果、小学校の成績表など他の観点からも分析し、日本人の「理想的」人間像を考察する。

アンケート表面の調査項目は、すでにふれたように、東 (1994) を参考にした (p. 81ff.)。本稿の検証に深く関わるため、ここでその質問内容や基本的意図を表で説明する。

### (質問内容)

☆あなたはどのような事に重点を置いて、お子さんをしてあげていますか？または、どのような面において、お子さんの早い発達を望んでいますか？  
以下の選択肢の中から3つを選び、重要度の高い順に回答欄にご記入ください。

(選択肢と基本的意図)

選択肢	内容	基本的意図	東(1994)での位置づけ (日米比較の観点から)
A	絵本などを一人で読み通すことができ、大体的内容を理解している	学習能力の重視	日本人が重視する
B	悪いことをして注意されたら、言うことを聞いてすぐにやめる	従順な態度の重視	日本人が重視する
C	家族や近所の人などに、きちんと挨拶ができる	礼儀の重視	日本人が重視する
D	食事の時、テーブルなどに足を乗せたり、肘をついたりしない	マナーの重視	日本人が重視する
E	やたらに泣かない	感情制御の重視	日本人が重視する
F	ひとりで食事や片付けができる	自立性の重視	アメリカ人が重視する
G	友達と一緒にいる時、リーダーシップがとれる	リーダーシップ性の重視	アメリカ人が重視する
H	自分の考えを他の人にはっきりと言える	自己主張の重視	アメリカ人が重視する

私たちは、東(1994)の位置づけにヒントを得て、A. B. C. D. Eがとりわけ多く選択されるのではないかと予想をたて、回答分析に進んだ。

## 2.1 保護者対象のアンケート結果（表面）

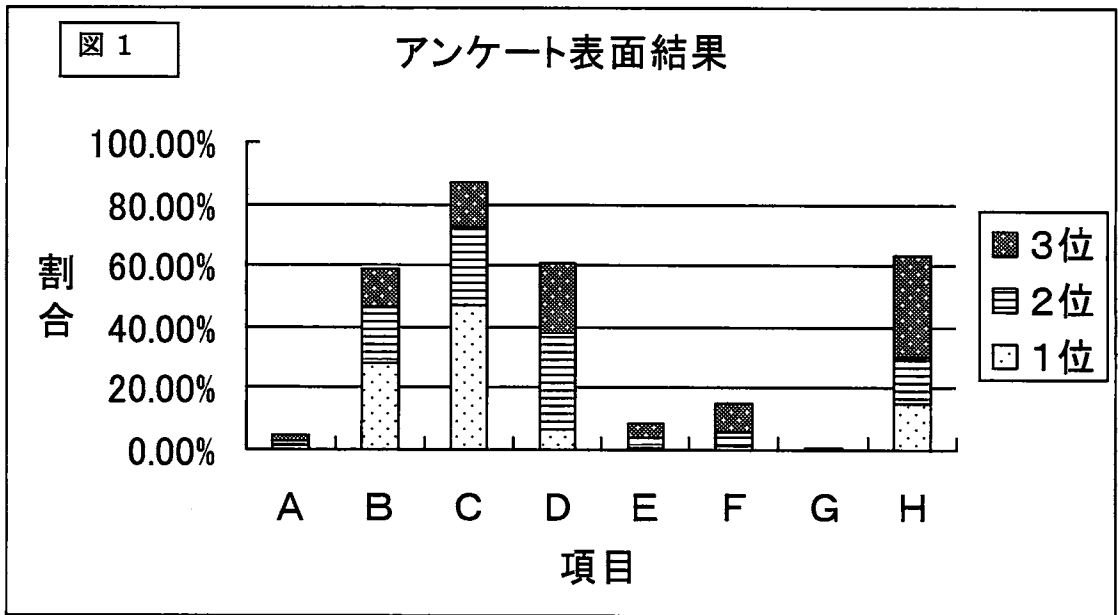


図 1 は、アンケート表面の結果をグラフにしたものだ。1 位・2 位・3 位を順に積みあげる表示形式をとっている。

結果として、まず明らかなことは、選択された項目の二極化であろう。つまり、上位 4 項目（B・C・D・H）と下位 4 項目（A・E・F・G）に、大差が見られるのだ。さらに項目ごとの順位内訳（1, 2, 3 位）に注目すると、上位 4 項目のうち、B・C を 1 位にあげる割合が 20% 超と多いことが分かる。また、D を 2 位、H を 3 位にあげる割合が高いようだ。

これらの結果によると、日本人は B・C・D・H に重点を置いて、子どもをしつけているといえよう。その中でも、特に重視するのは B・C で、その次に D・H が続く傾向が見られる。この結果は、予想した人間像（仮説）を立証するものだろうか。上位 4 項目に焦点をあてて、以下検証していく。

## 2.2 上位 4 項目と人間像（仮説）との検証

上記の上位 4 項目について、下記の順で検証する。

- ① C 今回の保護者対象のアンケートで、最も多くの回答者がこの選択肢を選んだため、最初に取り上げる。
- ② D アンケートでは 2 位にあげる人が多かったが、本稿では B と H の関係に注目したため、D を先に取り上げることとする。
- ③ B アンケートでは 1 位にあげる人が多かったが、次に取り上げる H との関

係で論じた方が分かりやすいだろうと判断したため、ここで説明する。  
④H アンケートでは3位にあげる人が多かったため、最後に取り上げる。

### 2.2.1 C「家族や近所の人などに、きちんと挨拶ができる」

Cの分析にあたり、上の図1をみてほしい。Cを1位に選ぶ人が最も多く、その割合はおおよそ50%に上ることが分かるだろう。したがって、このアンケート回答者の多くは、しつけにおいて、挨拶を最も基本としていると予想できる。では、他のデータにおいて、挨拶はどのような位置づけになっているのだろうか。

#### 金沢大学の学生の記憶

金沢大学生を対象に、子どもの頃に頻繁に言われた覚えのあるしつけ言葉について調査した結果を、ランキング形式で紹介する。

- ①迷惑行為の抑制—36票 「周りに迷惑をかけない」「人の立場を考慮ろ」
- ②挨拶—29票 「挨拶をしなさい」「お礼を言いなさい」
- ③年長者を敬う—26票 「年上の人を敬う」「親を尊敬しろ」
- ④男尊女卑—23票 「女の子なんだから」「女らしく」
- ⑤議論させない—20票 「言い訳をするな」「つべこべ言うな」

このデータでは、挨拶はどのような位置づけになっているだろうか。挨拶は、2番目に多く、票を集めた分野だと分かる。それでは1番多く票を集めたのは何かというと、迷惑行為を抑制させるしつけ言葉であった。しかしこの分野のしつけ言葉は、パターンが一定化しているようだ。すなわち、「迷惑」「人の立場」をキーワードにした短文のしつけ言葉が多かったのである。他方、挨拶に関するしつけ言葉は、場面設定や対象が具体的に決められて、比較的長いものが挙げられた。「人に『ごめんなさい』と言われたら『いいえ、こちらこそごめんなさい』でしょ。」や「お母さんが挨拶した人には続けて挨拶をしなさい。」などである。

このアンケートは記憶に頼ったものであるにもかかわらず、ここまで詳細に記述されているということは、保護者がそのしつけ言葉を継続的に多用したと考えていいだろう。したがって、以前においても、挨拶は最も基本とされていたことが分かる。

特徴的なものとして、「挨拶をすればよい子と見られ、挨拶をしなれば生意気だと思われる。そんなことで評判を落とすんじゃない。」という表現もあった。この表現から、挨拶は、周りが受ける印象に大きな影響を与えることが分かるだろう。

## 小学校 1 年生の成績表（生活面）

福井県の小学校の成績表では、10 項目中 2 番目に「気持ちよいあいさつやへんじができる」という評価項目がある。また、埼玉県の小学校でも、11 項目中 4 番目に「進んであいさつやへんじができる」と載っている。これらのことから、どちらの成績表にも、挨拶を促すような項目は存在したことが分かった。なおかつ、全項目内でも上位に対象項目が位置している。つまり、学校生活において、挨拶は重要とされていたといえるだろう。学校は共同生活の場だ。その場で挨拶が重要視されているということは、円滑に共同生活を営むにあたって、挨拶は不可欠な要素であるとの理解が可能だろう。

### （検証結果）

保護者対象のアンケート結果で、しつけにおいて、挨拶は最重要視されていることが分かった。また、他のデータから、日本人が挨拶に対して抱くイメージが明らかとなった。どうやら、挨拶は、周りに良い印象を与えるという認識があるようだ。このような挨拶が、重要視されているということは、周りとの関係をうまく保とうとしている人が多いといえるだろう。これらの分析から、C（挨拶）という観点から考えた場合、日本の人間像—「周りに対して配慮し、それに逆らうようなことをしない人間」という仮説に妥当性があると評価できるだろう<sup>1)</sup>。

### 2.2.2 D「食事の時、テーブルなどに足を乗せたり、肘をついたりしない」

これは、食事のマナーを表す項目だ。図 1 によると、1 位に D を挙げる人は少ないようだ。しかし 2 位になると、D は最も票を獲得している。しつけにおいて、最重要とまではいかないものの、重視している人が多い項目といえるだろう。他のデータではどうだろうか。

## 金沢大学の学生の記憶

子どもの頃に頻繁に言われた記憶のあるしつけ言葉を調査した結果、食事のマナーに関する表現は、13 票挙がり、8 番目に多かった。具体的には「食事中は正座」「食事のときに音をたてるな」などの表現があがった。これらの表現から、食事時の行動が細部にわたって具体的に決められていると感じられるだろう。

稲田（2004）に食事のマナーが紹介されている。この絵を見ても分かる通り、食事時の行動が、細部にわたって具体的に決められているようだ（p. 19）。

## こんなことしていいのかな、マナーいはんだよ!

全学年



大口でかきこまない。



はしを上にして食べない。



口の中に入っているのにしゃべらない。



ひじをはらない。 となりの人にぶつかる。



音をたてて食べない。



音をたてて飲まない。

### (検証結果)

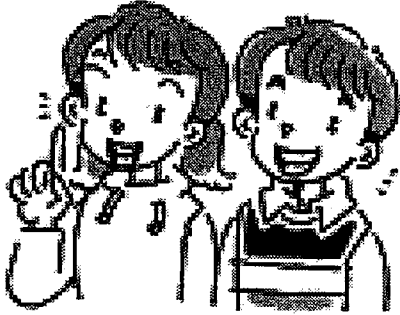
以上のデータから、しつけにおいて、食事のマナーは重要視されていることが明らかとなった。なおかつ、その行動が細かく決められているようだ。細かく決められているのは、なぜだろうか。Benjamin (1998) は、これに関して次のように述べている：

日本の給食時間で学ぶものは、社会の一員としての自覚です。みんなを満足させ、しかも公平であること、交替で務めを果たし、人に迷惑をかけないこと、一緒に食事をして人と人との付き合いを楽しむこと、同じ行動をし、同じ物を食べることで一体感を得ること、栄養のある昼食を採りながら、こうしたすべてを学んでいきます。(Benjamin 1998 : p. 55)

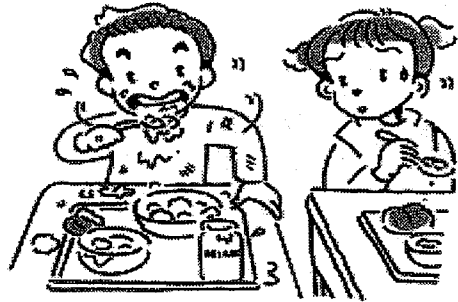
食事をする時はたいてい、一人ではなく、家族や友人と一緒にである。そのような集団生活の場で、できる限り周りに不快感を与えないように、行動しなければならない。そうした思いが、行動を細かく規定する要因になっていると考えられる。

稲田 (2004) にも、食事のマナーが周りに与える影響を表した絵が載っている (p. 19, 65)。食事のマナーがなっていないと、周りから嫌われてしまうと危惧する絵もある。

## こんな子はきられる



みんながおいしく食べるのに、  
マナーが大切だね。



■だらしない子

以上のことから、マナーは周りに不快感を与えないために必要な規則であるといえるだろう。したがって、D（マナー）という観点から考えた場合、日本の人間像—「周りの期待に対して配慮し、それに逆らうようなことをしない人間」という仮説は正しいと評価できるだろう。

### 2.2.3 B「悪いことをして注意されたら、言うことを聞いてすぐにやめる」

これは、従順な態度を表す項目である。周りの言うことを聞き、迷惑をかけないように振舞うという点において、日本の人間像—「周りのことを考えて、調和をしようとする人間」の仮説の内容が確認された。詳しい解説は、次のセクションで行なう。

### 2.2.4 H「自分の考えを他の人にはっきりと言える」

#### ①疑問点

予想外の結果であった。前述した項目は全て、日本の理想とされる人間像にかかわる内容のものであった。しかし、Hは、それらとは程遠く、むしろ自己主張をするドイツの人間像に近い。なぜ、日本人に対する調査でHが高い割合を占めたのだろうか。

## ②疑問を解く手がかり—BとHの二極化

なぜ、Hが高い割合を占めたのだろうか。この疑問を解決するために、どのような組み合わせでHが選ばれているのかを調べることにした。1, 2, 3位の組み合わせから、その人の考えが浮き彫りになると考えられるからだ。以下の表を見てみよう。

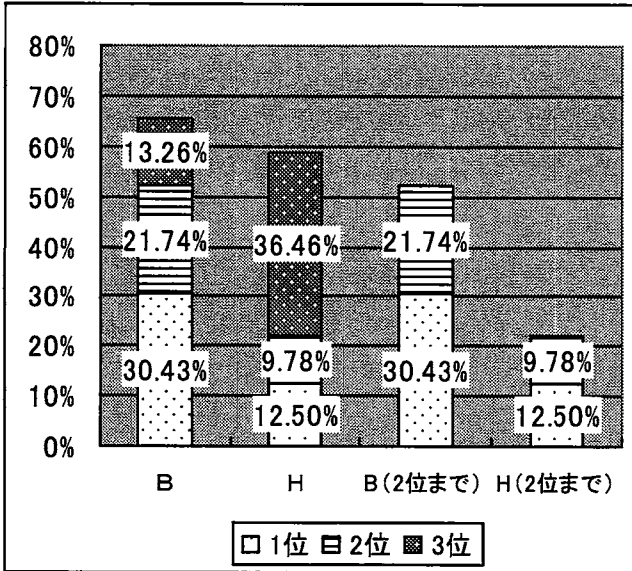
選択肢の組み合わせ (1位から順に)	回答数
C, D, H	40 票
H, C, D	25 票

保護者対象のアンケートで、最も回答数を集めた選択肢の組み合わせを示した。40票を獲得したのは、C, D, Hの組み合わせで、続いてB, C, Dの組み合わせは25票を集めた。ここで注目したいのは、BとHの二極化である。つまり、CとDはいずれも選択する人が多いが、BかHを選択する段階で意見が分かれているのである。

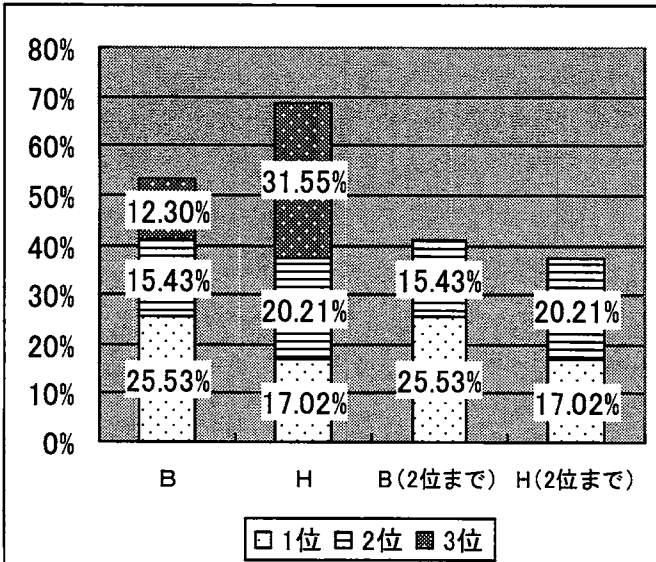
B「悪いことをして注意されたら、言うことを聞いてすぐにやめる」、H「自分の考えを他の人にははっきりと言える」は、内容から考えると、対照的である。なぜなら、Bは相手への従順さ、Hは相手への自己主張を表しているからだ。このような対照的項目が、アンケート結果において二極化している。すなわち、しつけとしては相反する価値のものが多くの保護者によって選ばれている。BあるいはHを選ぶのは、それぞれどのような保護者なのだろうか。その特性を調べることで、Hが多くの人に選ばれた理由が分かるかもしれない。

### ③分類—保育園・幼稚園

(保育園)



(幼稚園)



BあるいはHを選ぶ保護者の特性を調べるにあたり、まず保育園・幼稚園別に分類した。それが左のグラフである。

保育園では、3位までの単純合計で、Bが60%以上の値を記録しているが、Hより若干上回っているに過ぎず、有意味とは言えない。実は、重要な項目を3つ選択させるという設問は、過剰な要求に思われる<sup>2)</sup>。せいぜい2位までが基本的に重要と考える範囲で、それを超えると重要度はかなり低くなることが予想される。その意味では、この調査は、3位を考慮しないほうがいいかもしれない。とすると、Bが約50%で、Hが20%で、2倍以上の差が認められる。

他方、幼稚園は、3位までの単純合計では、たしかに、BがHより少ないことが分かる。しかし、これも上と同様に、2位までを考慮の範囲とすると、B、Hとも40%前後で大差がないことになる。これは、B・H両方とも重視しているということの現われと解釈できる。

なぜ、保育園と幼稚園でこのような違いがあるのだろうか。つまり、保育園では  $B > H$ 、幼稚園では  $B = H$  という違いである。そもそも、保育園と幼稚園の組織自体の違いは何だろうか。調べてみた<sup>3)</sup>。

	保育園	幼稚園
管轄行政	厚生労働省の福祉施設	文部科学省の教育施設
役割	お昼寝の時間があるなど、「生活の場」に近い。	休息は家庭で。「学校生活の準備段階」といえる。

このように両者を比較すると、幼稚園はいわば「教育の場」であるということが分かるだろう。その幼稚園に子どもを通わせる保護者に、 $H$ （自己主張）を重視する人も多かった。したがって、現在、自己主張の能力を育む教育が求められていると予想できる。

保育園は「生活の場」に近い。教育より、どのように生活するかが現在の課題と考える。よって、生活態度を示す、 $B$ （従順な態度）を重視する保護者が多いと予想される。

#### 保育士・教諭が実際使っているしつけ言葉の調査

実際の現場を肌で感じるために、保育園 2 園・幼稚園 1 園を見学した。そこで聞き取った表現の中で特に  $H$  と関係あるもの、つまり子どもに考えを言わせ、自己主張させるような言葉を紹介する。

##### （幼稚園）

- ・ 朝の会で、みんなが歌を歌っていたのに、この二人は歌ってなかったよ。どう思う？」
- ・ 「なんでズルイと思ったのかな？」
- ・ 「みんなはどうしたいの？」
- ・ 「紙で何作ろうか？」

##### （保育園）

- ・ 「何か言うことな～い？」
- ・ 「〇〇ちゃん、何しとんの？」
- ・ 「何て言うの？さよならって言うよね。」

このように、幼稚園でも保育園でも、子どもに考えを言わせるようなしつけ言葉は使われているということが分かる。しかし、幼稚園においては、子どもの行動だけでなく、心理をも聞き出すような言葉が使われているようだ。したがって、保護者対象のアンケート結果から予想された通り、特に幼稚園では自分の考えを言わせるような教育に力を入れていると考えられる。

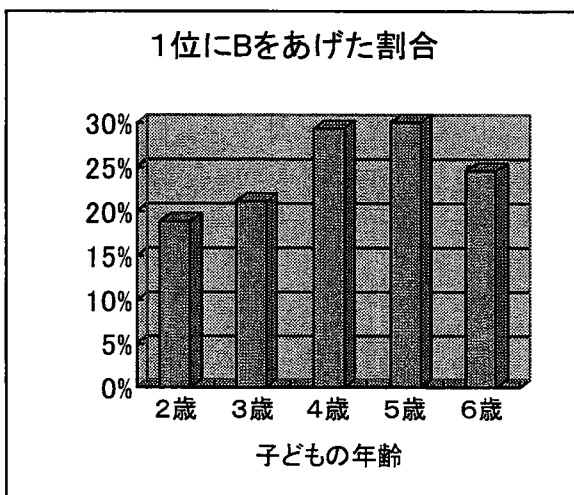
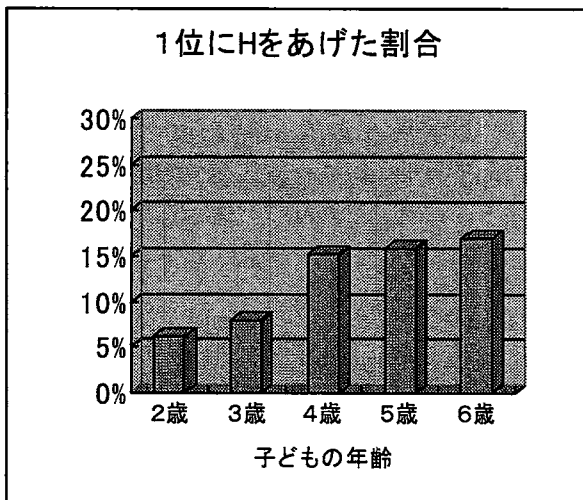
幼稚園は教育施設であり、学校生活の準備段階としての役割をもつ。この幼稚園で、自分の考えを言わせるような教育がされているとすると、現在では教育において自己主張能力が重視されているといえよう。

#### ④分類—子どもの年齢

右のグラフは、子どもの年齢別に、保護者がHを1位に選ぶ割合を示したものである（幼稚園・保育園の区別なく、全体を対象にしている）。

年齢が大きい子どもをもつ保護者が、より多くHを選んでしていると分かる。6歳というと、小学校に入学する直前の年齢だ。就学に際して、自己主張能力を育みたいという保護者の気持ちが伺える。

次に下にあるグラフをみてみよう。これは上のグラフと同じ条件で、Bの割合を示したものである。4～5歳をピークにして、6歳になるとその割合は低くなるのが分かる。Bは従順な態度を表す項目である。4、5歳が一番言うことを聞かない年齢で、そのためにBを選択する頻度が高くなったと考えられる。6歳になって落ち着いてきたという結果が反映していると言えよう。



## ⑤分類—保護者の年齢

現在の教育において、自己主張能力が重視されていることが読み取れた。それは次の3点から推定される。まず、教育施設である幼稚園に子どもを通わせる保護者が特に、自己主張能力を重視している点。そして実際、幼稚園において、そのような教育が行われている点。最後に、大きい年齢の子どもをもつ保護者ほど、自己主張能力を重視しているという点だ。

しかし、その傾向は、最近になって現われ始めたのではないだろうか。つまり、以前には見られなかったと推定される。それを検証するために、データを以下に示す。

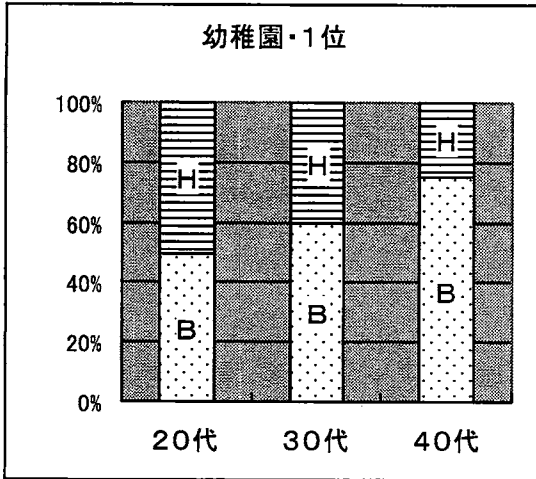
### 金沢大学の学生の記憶

頻繁に言われた記憶のあるしつけ言葉を調査した結果、自己主張に関係するような言葉はなかった。そして、むしろ逆の内容—Bに関するしつけ言葉が、5番目に多く挙がったのだ。

### ⑤議論させない—20票 「言い訳をするな」「つべこべ言うな」

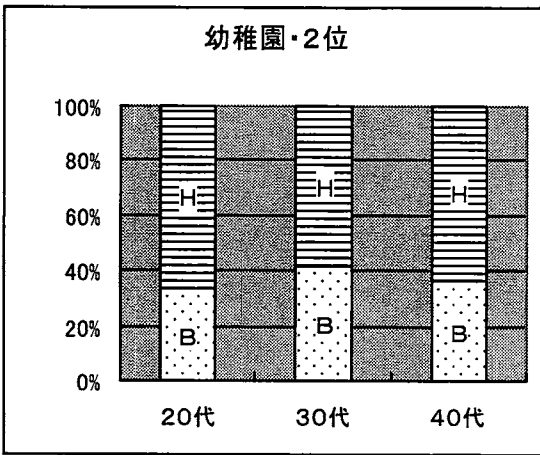
このことから、教育で重視されるものが、大きく変化したのではないかという予想がたつ。そこで、保護者対象アンケートの中で、最も時代の変遷を見ることができると思われる系列—保護者の年齢別に、BとHを探ってみる。

(幼稚園)



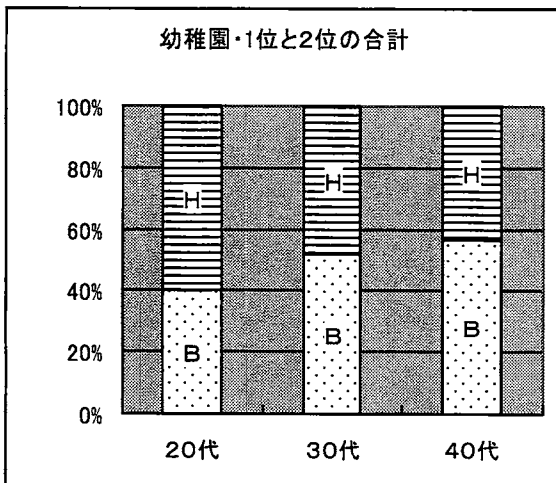
左のグラフは、幼稚園におけるBとHの選択割合を、保護者の年代(20代、30代、40代)に分けて表示したものだ。

まず上にある、1位のグラフを見てみよう。20代から40代に行くにしたがって、BとHが反比例しているのが分かる。40代から20代にかけてHを重視する率が高くなる。逆に、年齢が高くなるほどBを重視するようになる。



次に2位のグラフに目を向けてみよう。全体的にHの割合が高いが、年齢による有意な差は認められない。

まとめとして、下にある合計のグラフを見てみよう。年齢が高い人のほうが、Bを上位に位置づける傾向にある。他方、若い年齢の人ほどHに重点を置いていると言えるだろう。



保育園においては、どうだろうか。

### (保育園)

今度は、保育園におけるBとHの選択割合を、保護者の年代別にグラフで示した。

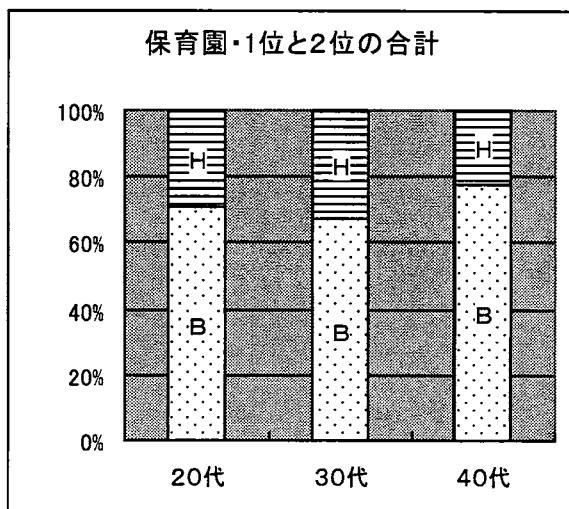
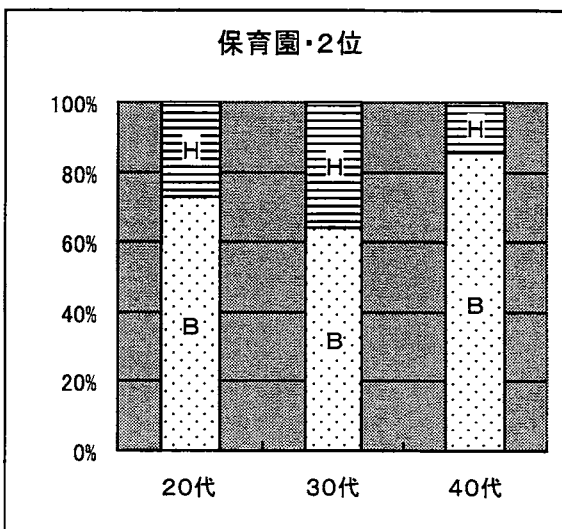
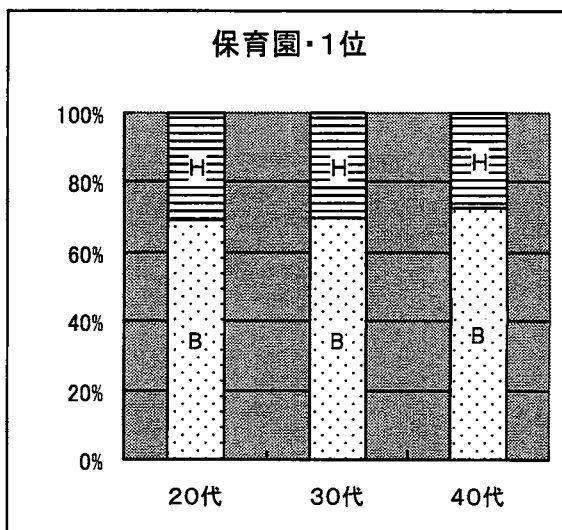
まず、1位のグラフを見てみよう。ここでは、有意な差はみとめられない。全体的にBが高い割合を占めているようだ。

次に2位はどうだろうか。ここでは、40代でHの割合が相対的に低くなる。一方、30代のHの選択割合が、1位と比べてやや高くなっていることに気がつく。

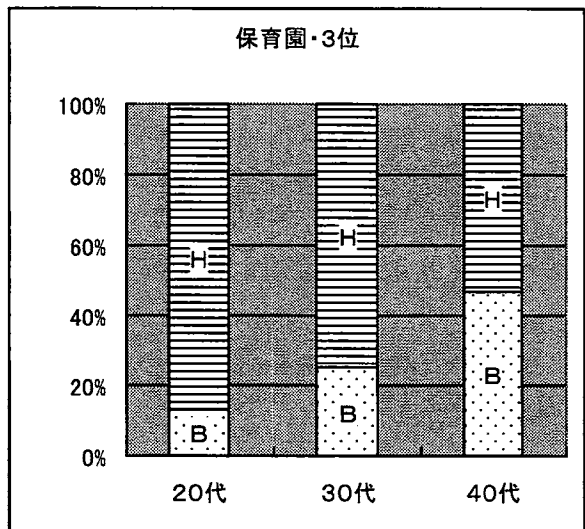
最後にまとめとして、1位と2位の合計のグラフをみてほしい。40代でBの割合がやや高くなっているが、注目すべき差は現れていないようだ。

上でも述べたように、検証の対象は1位・2位に限定した。しかし、保育園では保護者の年齢ごとに集計した結果、有意な差は現れていないようだ。

では、3位はどうだろうか。補足として3位を取り上げ、説明を行う。



3位のグラフをみてみよう。1位・2位ではBの割合が高かったのに比べて、3位ではHの割合が高いと分かる。特に20代では顕著に増加している。この結果は、3位という順位を、保護者がどのように把握したかによって、分析の評価が変わってくる。つまり、Hが自分の考えに合致しているために積極的に3位に選んだ場合と、3位に選ぶ項目がなくやむを得ず消極的にHを選んだ場合とでは、この差を有意味と捉えるか否かの判断に幅が生ずるのだ。よって確定はできないが、20代ほどHを重視し、40代ほどBを重視する傾向が多少認められるので、3位のグラフを紹介した。



以上、社会で必要とされる能力に変化があったのではないかとこの予想を検証するために、BとHの割合を保護者の年代別に示すグラフを紹介した。

グラフの分析結果として、幼稚園の1位のみに着目すれば、その予想は妥当であったと言えるだろう。なぜなら、幼稚園では、年齢が若くなるほどHを選び、年齢を重ねるほどBを選ぶ傾向が見られるからである。教育との関連で求められる能力が、BからHへ変化したのだろう。

では、具体的にどのような能力に変化が起こったのだろうか。まず、B「悪いことをして注意されたら、言うことを聞いてすぐにやめる」は、従順さを表す項目である。すなわち、言われたことを忠実にやる能力と解釈できるだろう。このBの割合が、保護者の年齢の増加に伴って増えたことから、以前はそのような忠実さが教育で重要視されていたといえよう。

次にH「自分の考えを他の人にはっきりと言える」について考えてみよう。Hの割合は年齢が若くなるにつれて増加した。したがって、現在の教育においては、自分の考えを相手に伝えるような、自己主張能力が必要とされていると考える。つまり、忠実さ・従順さから、自己主張へと求められる能力が変化したといえるだろう。

厚生労働省の労働経済白書<sup>4)</sup>によると、企業の賃金制度が成果・能力主義化へ変化しているということだ。成果をあげるためには、現状の問題点を自ら見つけて主張することが必要だ。このような社会評価の変化が、教育に変化をもたらした一つの原因と考えられる。

## ⑥分類—子どもの性別

社会の能力主義化は、個人の肩書きや性別にとらわれない自由な労働形態を生み出した。その一つとして、女性の社会進出があげられるだろう。

最初に、かつて女性はどのような立場にあったのだろうか。学生対象のアンケートを元に振り返ってみよう。

### 金沢大学の学生の記憶

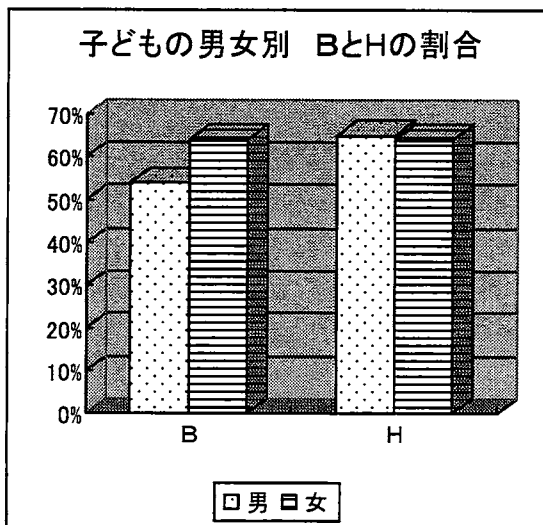
頻繁に言われた記憶のあるしつけ言葉を調査した結果、「女の子」「女」という言葉を使い、行動を限定する表現は 23 票を集め、全体で 4 番目に多く挙げられた分野であった。

### ④男尊女卑—23 票 「女の子なんだから」「女らしく」

例)「女の子なんだから(ちゃんとしなさい・行儀よく座れ・お手伝いをしなさい・そんな言葉を使うんじゃない)」

このように、以前においては、「女」という生物学的性の社会における役割を規定している傾向が見られたようだ。

では、今回の保護者対象アンケートにおいては、子どもの性別によって割合は変わるのだろうか。BとHに注目した。下のグラフをみてみよう。



グラフを見て分かるように、自己主張を意味するHの割合は、男女共に高いが、男女差がほとんど認められない。Bについては、女の子により従順さが求められているようだ。

さらに、興味深いデータがある。保護者対象のアンケート（裏面）で、以下のような問題を設けた。

- ・ あなたの娘さんがスカートをはいて、あぐらをかいています。何と言いますか？選んでください。
- ①「女の子なんだから、やめなさい」
- ②「恥ずかしいよー」
- ③ 何も言わない
- ④その他

結果は、②④①③、もしくは②④③①の順に多かった。

ところが、1つの幼稚園のみ、こちらの手違いのために、以下のような問題のアンケートが配布されてしまった。

- ・ あなたの娘さんがあぐらをかきながら、夢中になってテレビゲームをしています。何と言いますか？

集計結果で、最も多かったのは、「女の子なんだから（あぐらはかかないの・正座しなさい・足は閉じなさい等）」という表現であった。

上の方のアンケートでは、①「女の子なんだから、やめなさい」があまり票を集めなかった（全体の11.1%）。しかし、下のアンケートでは、「女の子なんだから～」という表現が多く書かれていたのである（全体の29.1%）。両アンケートに、内容に若干の違いはあるが、「娘さん」「あぐら」という大本の要素は同じである。大きく異なる点は、回答形式である。上では、選択式になっているのに対して、下は自由記述だ。選択式になると、予めいくつかの答えが文字となって用意されている。その上、選択項目の一番初めに「女の子なんだから」とある。その結果、①を避けようとする意識が働いたのではないだろうか。その意識の高さに、ジェンダーフリーの考え方の萌芽が見て取れる。

## ⑦疑問—「Hはなぜ多いのだろうか」への回答

Hを選択する率の高さは、近年の社会変化に起因すると考えられる。

まず、社会の能力主義化があげられる。自ら考え、提言する力が、評価されるようになってきた。そのため、特に幼稚園では、自分の考えを言わせるような教育がなされている。次に、男の子の保護者も女の子の保護者も、同様にHを高く支持したのは、女性の社会進出が顕著になっていることも原因だと考えられる。現に、アンケートの質問内容と結果から、「女」に関するしつけ言葉を避ける意識が伺えた。

### 3 本稿のまとめ

#### 3.1 日本の人間像の検証

本稿は、日本の保護者対象アンケート調査を中心に分析を進めた。日本の「理想的」人間像についての仮説—「周りの期待に対して配慮し、それに逆らうようなことをしない人間」を検証するためである。その結果、上位4項目のうち、B・C・Dは仮説の妥当性を支持していることがわかる。しかし、Hについては、仮説と相反するものであった。どうしてだろうか。これには、いくつか理由が考えられるだろう。たとえば、設問の仕方である。「しついで重視している点」と「子どもに期待している点」とを、ダブルクエスチョンにした。どちらの観点から回答するかにより、結果は異なるかもしれない。これらを考慮した上で、仮説を検討する必要があるだろう。

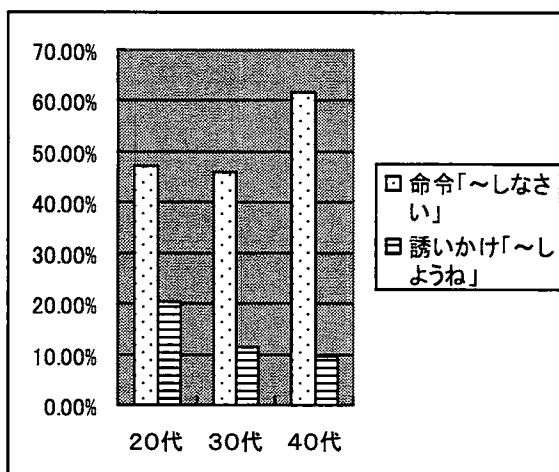
では、日本の「理想的」人間像は果たしてどういうものだろうか。本稿は、日本のアンケートのみを対象にした。現在は、ドイツへのアンケート調査の配布段階にある。指導教員の西嶋先生および2004年9月末に帰国した留学生のクールマン氏の協力を得て、5月末までに収集可能と見込まれる。したがって、ドイツのアンケート結果と比較した上で、日本の「理想的」人間像をより図式的に提示したいと考えている。

#### 3.2 しつけ言葉にこめられる親の願い—日本のアンケート収集を終えて

保護者対象のアンケートを集計していると、アンケート一枚一枚から保護者の願いが伝わってくるのを感じた。小さい頃、親や教師から怒られたことを思い出し、それは私たちのためを思っただけの言葉だったと改めて確認できた。

最近、子どもに怒らない親が増えているという（正高 2003）。アンケート分析を終えて、それは、もしかしたらH「自分の考えを他の人にはっきりと言える」という項目が関わっていそうだ。たとえば、アンケート（裏面）の以下の問題を見てみよう。

「病院内でお子さんが騒いでいます。周りの人がこちらをチラチラと見えています。何と言いますか？」という設問である。語尾に注目して分析した結果が右のグラフだ。強めの語尾「静かにしなさい」等を命令として、柔らかい語尾の「静かにしようね」等を誘いかけとして分類した。前章 2. で扱った B と H をそれぞれ命令と誘いかけに置き換えると、右のグラフは B と H の分布図に傾向が似ていることがわかる。



この結果から判断すると、自己主張ができることに価値を置く以上、押し付けを避け、理由を言わせるように仕向けていくという傾向があるといえる。

親は誰でも、子どもに社会のルールにしたがって行動できる大人になって欲しいと願う。能力主義化・女性の社会進出に伴い、自分の考えを主張し、他を率いていく力のある人は評価されるかもしれない。しかし就職活動を経験し、様々な社会人を見た限りで、自己主張能力はさほど求められてはいないと私たちは考える。では何が求められているのかというと、周りへの気遣い・礼儀であろう。

社会はもっとシンプルだ。私たちは、自分の考えを主張する個体である以前に、人間である。人間は決してひとりでは生きていけず、様々な組織に属し、互いに助け合いながら成長していくものだろう。そこで必要とされるのは、周りへの気遣い・礼儀だ。現代の教育は、「個」に捉われすぎて、「人間関係」という前提を見失っている。アンケートから察することのできる情報はごく僅かに過ぎないが、「人間関係」という前提を再度思い起こしてほしいと私たちは考える。

## 注

- \* 本稿は、平成 16 年度金沢大学学長研究奨励費による研究成果の一部である。本研究は、金沢大学経済学部社会言語学演習に所属する 3・4 年生が中心になって実施した。その研究グループの構成員はつぎのとおり：磨矢順子（3 年生）、綱田百合香（4 年生）、山崎瞳（4 年生）、それにクールマン・ユリア（Julia Kuhlmann：特別研究学生）である。
- 1) なお、未だ推論段階ではあるが、挨拶の価値に地域差が見られると私たちは考えている。前述した成績表のデータに、再度注目してほしい。項目順位をみると、福井県では 2 番目、埼玉県では 4 番目となっている。さらに、保護者対象のアンケート調査を、保護者の出身エリア別に統計し直すと、興味深い結果が得られた。

保護者の出身エリア	Cを1位にあげた比率(%)	引越し回数の多い順(引越しセンター調べ)
北信越	50%	5位
東海	50%	3位
近畿	48%	2位
関東	35%	1位

Cの比率において北信越と東海は同数であるものの、Cを1位にあげた比率と、引越し回数が反比例していることが分かるだろう。引越し回数が多いということは、人の移動が激しいといえる。そのため、周囲との関係が希薄になり、挨拶をする割合が少ないとの見方はできる。

しかし、現段階では、保護者の「出身」エリア別の比較をした状態だ。「その場所」を示す論拠に欠ける。実際、首都圏にある幼稚園・保育園にアンケート調査依頼をして、比較する必要があるだろう。

- 2) 保護者アンケートでは、1位・2位・3位のうち、1位・2位を主な検証の対象とする。アンケートで「選択肢の中から3つを選ぶ」と数を限定する質問を提示した。本来、基本的に重要と考える要素は、1つ、多くて2つだと予想される。しかし、3つを選ぶことが必須となっている以上、自分の考えにすぐわない項目を選択する可能性はあるだろう。この項目選択の限定から生ずる、考えと結果の食い違いを考慮し、基本的に重要と思われる1位・2位を主な検証の対象とする。3位については、1位・2位の補足的な材料として活用する。

3) <http://allabout.co.jp/children/kindergarten/closeup/CU20030430/index.htm>

4) 厚生労働省 労働経済白書 平成15年度版

賃金制度の動向として、成果・能力主義化をあげている。3割以上の企業が、賃金の決定要因として、業績・成果部分を5年前より拡大。また今後7割以上の企業が、昇給・昇格を能力主義的に運用し、基本給・ボーナスへ成果主義を導入する賃金制度改革を考えている。

## 参考文献

- 東洋：『日本人のしつけと教育』。東京大学出版会，1994。
- 稲田百合 他：『身につけたい小学生のマナー・しつけ・エチケット事典』。小学館，2004。
- Benjamin, Gail R.：『ニッポンの学校ってどんなところ？』。白揚社，1998。
- 正高信男：『ケータイを持ったサル』。中公新書，2003。
- Marui, I. / Y. Nishijima / K. Noro / R. Reinelt / H. Yamashita: "Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German". In: U. Ammon / M. Hellinger (eds) : *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin etc.: de Gruyter, 1996, 385-409.

## 謝辞

尾島恭子先生（教育学部）と宮崎悦子先生（経済学部）には、保育園・幼稚園の紹介に際してご協力をいただきました。また、久保治輔先生（自然科学研究科）、Annette Thierfelder-Kuboさん、志村恵先生（文学部）、Heiko Bittmann先生（留学生センター）には、ドイツのしつけについてご意見をいただき、アンケート作成の際に役立てることができました。さらに、星野伸明先生（経済学部）には、アンケート分析方法に関して、ご指導いただきました。こころよりお礼申し上げます。

金沢大学附属幼稚園、天徳幼稚園、めぐみ幼稚園、かさまい保育園、のぞみ保育園、めぐみ保育園、若松保育園の職員・保護者の皆様には、アンケートにご協力いただきました。記してお礼といたします。最後になりましたが、文学部・法学部・経済学部学務系の桶谷清正様には、金沢大学附属幼稚園での調査の仲介をしていただきました。お礼申し上げます。